
深蒼の瞳

-彼方-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深蒼の瞳

【Nコード】

N1135G

【作者名】

一彼方一

【あらすじ】

アクア。それがこの物語の主人公である。とりわけ大きな体を持つわけではなく、筋骨隆々というわけでもない。幼さの残した顔だが、蒼の瞳は、まるで海の底を映したかのように深く輝いていた。

第0話 プロローグ (前書き)

自分のもうひとつの小説が完結するまでこの作品は更新しないつもりです。

本当に申し訳ありません。出来る限り早く完結させますので、どうかそれまでお待ちください。

更新しないつもりでしたが、他の小説が行き詰ったので、少し書くと思います。気まぐれで申し訳ないです。

第0話 プロローグ

一条の光が、雲を貫き大地を照らす。

にわかに遠雷が轟き、降り始めた雨が森の香を舞い上げる。

気づけば、姿は目前にあった。

天を飲み込む嵐の下、遠巻く風のすぐ向こう、美しく荒ぶる絶対者。

そう、すでに両者は知っていた。

出合いが必然であることを。

そして、間もなく彼らが分かたれることを。

狩人と、その獲物。どちらかが、どちらかに。

世界が未知で溢れていた時代。

人間の力など、幽かなものでしかない。

それ故に。

己に鋼を纏い。

己に斬刃を握らせる。

血で血を洗う荒々しい世界に飛び込んだ一人の少年。
名をアクアという。

海の底を映したかのような深い青色の瞳はよく目立つが、これといった特徴もない平凡は少年。
歳は15とまだまだ子供。

そんな彼の生きた数十年は、世界にとってほんの一瞬でしかないだろう。

その日も訪れるその瞬間。

一瞬の光となって駆け抜けた彼の物語が幕を開ける。

第0話 プロローグ (後書き)

ブログに投稿している小説です。

とりあえず、こちらに移動させて頂きました。

更新頻度はひどいです (笑)

ですが、飽きずに最後まで見守っていて下さい。

必ず完結させます。頑張ります (笑)

第1話 【f o r m a l h u n t】

「本気、なのか？」

「ああ。本気だ」

冷たい風と。

暖かい風が同時に吹いた。

それは焼き石の如く。

それは鋼の如く。

それは巨山の如く。

熱っぽい液体が全身を駆け巡る。

狂うのも時間の問題かもしれない。

其れは熱くて堅くて揺るぎないもの。

滾る血を胸に仕舞い込み。静かに静かに暴走させる。

第1話【f o r m a l h u n t】

「大変だ！老山龍この村に向かっていているぞ！」

1人の青年が村の入口でそう叫んだ。

老山龍。それは太古の時代から生き永らえる巨大な龍。

全長は百メートルを超える。

質量は図ることさえ敵わない。

まさに山のような巨龍。歩く災厄とも言われる。

そんな怪物じみた巨大な龍がこの村に向かっている。そんな報告を、この村の人々は受けた。

住民はのべ数十人。ひとりの老人が治める小さな村。名をココット村という。

そんな報告を受けた夜。村の酒場で集会が行われた。静かな夜。パチパチと灯の音が村に響きわたる。

「今日は集まってくれたことに感謝する。みんなの知っての通り、この村に老山龍が向かっておる。ここを通ればひとたまりもない。村は壊滅じゃ」

一際背の低い杖をついた老人が落ち着きを払って話し始めた。

「そこで、わしに提案がある。この村に住むモンスターハンターに討伐、および撃退を依頼したい」

それと同時に、ある人物に視線が集まる。

見た目は少し幼い。全身を白い防具で身を包む、華奢な体型の人物は俯いて腕を組んでいる。

「どうじゃ？やってくれるか？これはわしが決めることでは無い。おぬしが決めることじゃ」

期待を孕む視線の先の人物は、小刻みに肩を震わせていた。端から見れば怯えているようにも見えただろう。

それは徐々に大きく震えだした。

「もちろん」

すつ、と顔を上げた。

それと同時に茶髪のショートカットの頭髮が揺れる。

その顔には自信が如実に表れていた。

「そうか。すまん。フィリアよ」

そう言うと、辺りから安堵の表情と言葉が漏れる。

「フィリアがやってくれるなら安心だ」

「村は救われる」

「ありがとう」

フィリア・ラルミス。

全身をフルフルと呼ばれる飛竜の防具で身を包み、背中には二対の短剣が背負われていた。

この村で唯一のモンスターハンターである彼女。腕は確かだ。

モンスターハンター。それは、強大なモンスターに挑み、狩猟する職業。

誰にでもなれるが、誰にでも続けられるわけではない。

それは死と隣り合わせの危険極まりない職業である。

ときには村の住民から。ときには隣村から依頼を受け、それを達成する。

ある者は言った。

『ハンターとは、世界のもっとも後ろで、もっとも先端で活躍する職業。自分の命を盾とし、自分の手を汚して生き抜くものだ。命の大切さを、尊さを熟知しながらも命を奪う職業だ』と。

「これにて閉会じゃ。明日は平和の杯を掲げるとしよう」

それを合図に村の住民は立ち上がった。

ときたま住民はフィリアに対して何かを言ったり頭を下げたりしながら帰っていった。

翌日。

朝日が昇るか昇らないかの時間。老山龍が歩くのに合わせて地響きが始まっていた。

「村長。行ってきます」

「おぬしなら心配いらぬと思うが、気を付けるんじゃぞ」

そんなやりとりが村の入口で起きていた。

それを見ていた少年がいた。

アクア・ラレンズ。

深蒼の瞳を持った少年は、老山龍の地響きにより目が覚めただけだった。

その少年の家がたまたま村の入口に近くて。

その少年がたまたま目が覚めて。

その少年の幼馴染がハンターだった。

この日が無かったら、この少年はモンスターハンターにはならなかったのかもしれない。

そして、その少年はフィリアが村から出るのとほぼ同時に再び眠りについた。

再び少年が目を覚めたのは、村の住民の声によるものだった。

「フィリアが帰って来たぞ！」

「じゃあやったのかい！」

「ああ。肩に大きな老山龍の角をぶら下げて来た。凱旋だ！」

これがフィリアの村での最後のクエストとなり、同時にアクアという名のモンスターハンターの生まれた日でもあった。

第2話 **【Training】** (前書き)

この小説を大幅に編集いたします。読んで頂いた方、非常に申し訳ありません。

第2話 【Training】

拝啓。

冷たい風はゆるみ、春の兆しを感じてきましたが、コcott村の皆さまはお変わりないと存じます。

俺も元気で過ごしています。

ジャンボ村は名前ほど大きな村でもなく、コcott村とはまた違った雰囲気漂う村です。

夢だったハンターになってもうすぐ1年が経とうとしております。そんな俺は今、鬼のような教官と地獄のようなトレーニングに励んでいます。

「この程度でへばってはハンターなんか勤まらんぞ！」

昼食前のトレーニングは決まって『足腰』を鍛えるメニューだ。

長距離走や短距離走、砂場ダッシュやラダーを使ったステップ。

地味で面白味のないメニューばかり並ぶ。

季節は温暖期を迎え、ジリジリと走者の体力を容赦無く奪い取っていく。

そのため、ペースを落としてしまったのは仕方がないのだが、それを許さないのが『バラス教官』だ。

村の周りは1周2キロ。それを10周するのが今日のメニューのひ

とつだ。

「ペース落ちてるんじゃないのか。ラスト1周もっと上げろ！」

毒づくことも忘れて、“ラスト”という言葉で少しばかりやる気が出てきた。

もはや虫の息なのだが。

村の周りを1周するわけなのだが、村は塀で囲まれていてショートカットする道がない。というかそもそもショートカットなどしようものなら忽ち刺身にでもされかねない。

半ば気合いで最後の周を片づけ、その場で倒れこんだ。

「よし。じゃあ昼飯にするか」

そう言って、倒れている俺を尻目に教官は宿舎に戻った。

くっそ……。鬼……。

そう思うも、口からはハアハアと酸素を送り込む音だけしか出なかった。

「あゝ。ホント鬼だ……」

「お疲れさま。でもまだ午前中だよ。午後もファイト」

「午後は実践か。ホント、殺す気だろ。あの教官」

毎日のことだ。午前中のトレーニングを終えて部屋に戻ると、同室のカイに愚痴をこぼす。いや、泣き言だ。

ジャンボ村で唯一のハンターである俺は、ジャンボ村で唯一の教官（そもそも普通村に2人も教官はいないのだが）であるバラス教官に、『ハンターとは何か』ということ、それはもう心身ともに染み込んで一生拭えないほどまでに教え込まれている最中である。

この村に来てから半年は、ひたすら座学だった。

まずはハンターとは何か。そして、ハンターの基本であることの全て（調合素材の組み合わせを全通りの暗記。肉を焼くタイミング。モンスターの生態。どのモンスターからはどのような素材がどの程度の割合で取れるか。また、武器一つ一つの性質。長所と短所。防具のスキルに関して等々）を頭に叩き込んだ。

近年、モンスターについてはある程度解明されてきた部分もあり、このようにして『身体に教え込む』

よりも『まずは頭で理解する』方法を取り入れる教官も少なくない。

だがこの教官は、その両方を取り入れ、『頭にも身体にも教え込む』方法を取り入れ、目下実践中。

午前の基礎体力作りを終え、食欲のない昼食を無理矢理胃に押し込み、1時間の休憩を挟むと、すぐさま午後のトレーニングに移る。

本当に、食欲はほんの1ミリほども出ないのだが、それでも入れて

おかねば冗談抜きで死ぬことになる。

午後のトレーニングは実戦。

実戦とは、その名の通りモンスターと戦うトレーニングだ。

この実践トレーニングで最初に戦ったのは『アプトノス』だった。

アプトノスとは、極々普通の草食竜で、極めて大人しく、ハンターを見ても逃げ出すことも襲い掛かってくることもない、いわば最も狩りやすいモンスターだ。

そんなモンスターを相手に教官から使うように指示された武器は『ハンターナイフ』と呼ばれる丸い盾と20センチ程度のナイフが一揃いになった、初心者ハンターが使う『片手剣』に分類される武器だ。

そのアプトノスというモンスターだが、狩りやすいとはいえ、曲がりなりにもモンスターであることには間違いない。そのため、身体の大きさは人間を遥かに凌駕している。牛よりも馬よりも大きな生き物だ。

そんな生き物を相手にたった刃渡り20センチのナイフを使うということは。それは“一度斬りつけた程度では死なない”ことを意味していた。

平和そうに草を食すアプトノスを、倒れても、どれだけ血が溢れても、命を奪うまで何度も斬り付けなくてはならない。

生きるために命を奪う。それが自然の摂理であり、人間も例外では

ない。そんなことすらさえ忘れかけている俺はまざまざと現実を見せ付けられた。

『ハンターとは、世界の最も裏の世界で、あるいは先端で活躍し、自分の命を盾として、自分の手を汚しながら生き抜く職業だ。命の尊さを熟知しながら、それを奪う職業だ』

ハンターとはそういうものだ、教官は無言で言い放った。

ハンターとして生きること。命を奪うこと。それらの行為を理解することこそが、実戦トレーニングの本当の意味だ。

狩りが出来ないハンターなど、ハンターではない。

狩りに慣れること。生命の断つことに慣れなければ、ハンターになんかなれるはずもない。

どんな苦しいトレーニングよりも遥かに苦しいトレーニングだった。そして、どんなトレーニングよりも記憶に残るものになった。

そのときに自分で剥ぎ取った肉を焼いたこんがり肉は、これまで食べたどんなごちそうよりも最高に美味かった。

第3話 【Blue】

何度目かの実戦トレーニング。今日の相手はランポスだった。

「いいか。ランポスとは集団で狩りを行う非常に頭の良いモンスターだ。肉食で獰猛。ハンターを見つけると、その強靱な脚力を生かし飛びかかってくる。その距離は10mを一足で超し、2m程度の高さも瞬間的に飛び上がることの出来るほどだ」

実戦の直前、教官が説明する。

ランポスについての知識は粗方頭に入っているつもりだった。

そう思い、挑んだのは2週間前のことだった。

そのエリアの空気は、ひどく緊張していた。

ぴんと張り詰めた糸のように、少しの振動でさえも肌で感じ取れる気がした。

息をひそめる小さき生命。存在さえも忘れそうな木々。

違和感という支配。動けば忽ち食われそうな匂い。

何かを食す、何か。

ぎょろりとした爬虫類独特の目。トサカに青い鱗。手足には鋭い爪。

このエリアの、支配者の正体。

距離にして約10メートル。

貪る何かは、鹿のような生き物の死体。

貪る者は、明らかに肉食のモンスター。

今回の訓練の標的。ランポス。

足音で気付かれたか。それとも気配か。

ゆっくりとこちらを向いたモンスター。

対峙して2秒程度。向こうの鳴き声で我に返った。

『こいつがランポスカ・・・！』

そう思うのと同時、ランポスは視界から外れた。

そして、現れたのとさらに同時、激しい衝撃を受けた。

鈍い痛みを認知すると、俺は武器を構えた。

新米ハンターにも討伐が依頼されるモンスター。身体はあまり大きくない。

やけに細いそのつの身体を見る限り、あまり強そうには思えなかった。だからこそ新米ハンターにも依頼が回されるのだろうと思った。体中の痛みはあまり感じなかった。

『こいつを狩れば、ハンターとして成長した証になるかもしれない』
下心、というわけではない。

ただ、心からそう思ったのだ。

そして

『自分になら狩れる』

そう信じて疑わなかった。

ナイフを握り直す。
盾を握りしめる。

そいつが再度飛びかかるより先に、体重を乗せて斬る。
ランポスはその衝撃のせい、声を上げながらのけぞった。

弾かれることはなかったが、想像以上にその鱗は硬く、明らかにアプトノスのそれよりも強固だった。

そしてその隙になんとか斬り付ける。

『・・・いける！』

そう思った。確信に近かった。

そしてその瞬間、身体の右側に鋭い衝撃を受けた。

予測していなかった攻撃に、俺は堪えることも出来ずにたまらず吹っ飛ばされた。

顔を上げると、そこには青い鱗を纏ったモンスターが2匹。いや、3匹になっていた。

そういえば、ランポスは集団で狩りをするんだっけ。そのことを思い出したのはそのときだった。

目の前のランポスが鳴いた。

それに反応するように、どこからか同じような鳴き声がこだまする。

仲間と呼ばれたのだ。

そして、俺が咄然としているものの数秒で、3匹が5匹。8匹と数が増えていった

第4話【Nature】

「というわけで・・・」

「気合いが足りん！」

そんな訳の分からない言葉で一喝されたは、俺がランポスの集団を見て情けなさも憚らずに逃げてきたからだ。

そんな教官は、さて。といいながら防具を脱いだ。

ちなみに、教官は狩りに出るわけでもないのに常に『クロオビシリーズ』という防具に身を包んでいる。夏でも関係ない。

「君も防具を脱げ」

「・・・え？」

「脱げ」

「・・・はい」

俺は教官の言葉に従った。

防具の下はインナー。もはや下着のようなもの。

下着一枚の男二人が対峙している。

・・・見苦しいことこの上ない。

「よし。では始めよう」

そう言って教官は腕を組む。

「・・・教官、何を始めるんです・・・うつ」

鳩尾に鈍い痛み。どうやら殴られたらしい。

教官が近づいたことすら見えなかった。気が付いたときには殴られていた。

「私を倒してみろ。そうすれば君にこの訓練所の卒業資格を与えよう」

教官はそう言った。唐突にもほどがあるし、意味が分からないのだが。

それはすなわち、もうこんな地獄を見なくて済むということだ。そしてついでに、これまでのあり得ない訓練をやらせられた日頃の恨みも晴らせる。

・・・まあ、鍛えてくれたのだから感謝するのが当然なのだが。

とにかく俺は気を取り直して構える。教官の言ったことは絶対だ。
口答えはゆるされない。

このように唐突に始まる訓練でも、いつも必ずどこかに意味がある。

教官は腕を組んだまま動かない。
しびれを切らして突っ込む。殴りかかる。

一応半年間、いつ身体を壊してもおかしくないような訓練を続けてきたんだ。

少なくとも、一般の同年代の人間よりは、たとえ喧嘩でも強いはずだ。そうでなければ今までの訓練はなんだったんだということになる。

全力を出したつもりだった。
本気で殴りかかった。顔面。人間の急所が集まる正中線。すなわち、鼻。

そして、拳に少しの衝撃。
見事に叩き込んだはずだった。

それなのに教官は、少しも体制を崩すことなく立っている。

「・・・悪くない。体重も乗っていて、勢いも乗せられている。だが甘い」

「な、なに・・・がですか・・・？」

「まずはただ単純にだが。拳に乗っている体重と勢いがだ。君の体重はいくつだ？」

「えっと、60くらいです」

俺は自分の体制が、拳が教官の鼻の位置にあるまま応えていることに気が付いて体制を正した。

「ではその拳に全体重である60キロが乗っているか？さらにその上に勢いが加算されている。軽く見積もって、本来君の体重からすれば200キロはあるはずだが」

俺は首を横に振った。あるわけがない。

「地面から足。膝、腰、胴、肩、肘、手首、そして指先まで。衝撃を伝える全てに全力で力を込めなければ本気とは言えない。もう一度」

そんなもの意識しなかった。当然だ。普通の人間ならば、全力で顔を殴られれば倒れるはずだったが、相手は教官だった。普通なはずがない。

もう一度と言われると、何となく殴りにくい。が、躊躇している俺を見て教官が言った。

「殴らないなら、私から殴りにいこう」

ハッとするのと同時、またもや鳩尾に衝撃が走った。
苦しさに耐えきれず膝を折る。

「さあ。続けるぞ」

くっそ。鬼・・・。

心の中で毒づいて、何とか立つ。そして、教官目掛けて拳を叩きつける。

「ダメだ。もう一度」

殴る。

「腰が甘い。地面は動かないのだ。下半身で大地を捕まえろ」

また殴る。

「気合いが足りん。もう一度」

殴る。

「ダメだ」

また殴る。

そんなことを何十回と繰り返した。

そして、へろへろになりながらも殴り続け、何十回目か。もしくは百を超えたときだった。

『バキッ』

嫌な音がした。殴ったときになったのだが、教官ではない。俺の拳からだった。

「イッテ・・・」

「折れたか。よし。今日は終わりにしよう。回復薬グレートを支給しておこう。来週には治るはずだ」

『くっそ。鬼・・・』

気が付けば日は沈みかけ、大地が橙に染まっていた。

宿舎に戻った俺は、カイに回復薬グレートを染み込ませた包帯をかなりキツく巻かれていた。

「ちょ、イタイ！痛いつて！」

「ダメだよ。添え木もないんだから。これくらい強く巻かなくちゃ。・・・はい。終わり」

「カイも中々鬼だな・・・」

「それより、どうしたの？今日はランポスの討伐訓練じゃなかったの？」

俺はカイに今日のことを喋った。

主に教官を殴り続けたことについて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1135g/>

深蒼の瞳

2010年10月10日02時56分発行